

1970年シカゴ生まれ。プエルトリコ系アメリカ人一家に生まれ、十代でグラフィティアートと出会う。その後ペインティングでの抽象表現を進め、'94年初個展。2002年シカゴ現代美術館で「sampler」を発表。5/14～6/19東京・SCAI THE BATHHO USEで個展「BEAUTIFUL THINGS」を開催。9/1～9/26大阪・equalへ巡回した。9/17～2005年1/14イリノイ州立美術館シカゴギャラリーで「Beautiful Otherness」を開催。



Art of Living People

text by Sachiko Matsushita / photograph by Panda Kanno (D-CORD)

Dzine ディーザイン・アーティスト

時代のスピードを、少しだけ緩めるために。

松下幸子=文 菅野ぱんだ=写真

鮮やかな色で塗られた絵画の表面に、隙間なく小さなガラスビーズが並べられている。ポップな色遣いととも、見る角度によって表情が変わるDzineの作品は、見飽きることがない。5月に開かれた日本での初個展「Beautiful Things」で展示された幅9mの大作「sampler」の制作期間はわずか一週間。「一日に10～12時間は描いたよ。音楽を大音量で流し、描いては眺め、また描く。僕にとって描くのはDJがトラックを作ると同じことなんだ。一つ一

つのトラックはフラットでも、それを重ね、どんどん音をのせていくことで豊かになる」パリでの個展やARCO（国際現代アートフェア・マドリッド）での壁画制作プロジェクトなど、ヨーロッパでの作品発表が多い彼は、自らを'30年代のジャズミュージシャンになぞらえる。「彼らみたいに、海外で賞賛を受けて凱旋したい。そのためには日本での展示会は、自分にとってターニングポイントになる貴重な機会。だから制作にあたって、作品を見つめ直し、じっ

くり時間をかけて技法を発展させた。描かれた表面をビーズで覆い、プラスチック板を乗せることで作品は劇的に変わる。長い間見ていた絵画が最後の何日間かで全く違う作品になるんだ。僕の作品は抽象画だけれど、斬新でセクシー。じっくり見ると、独特の塗りに気がつくと思う。さっと見回しただけではわからない、作品の前に立ち、作品サイズや幾度も重ねられた色を見てほしい。色も言語の一つだからね」

作品の着想は音楽やセック

スから、と笑う彼にとって、音楽やセクシーなものはすべて「美しいこと」。「戦争やテロのニュースが流れない日はない。3歳の息子と一緒にテレビを見ているのがつらくなる。ネガティブで疲弊する現代だからこそ、物事の本質が問われ、美しい絵画が必要とされているはずだ。僕は世界を変えられないし、エイズを治すこともできない。ただ絵を描き続けるだけ。でももしかしたら、時代のスピードを少し緩めることができるかもしれない」③



Trunk Jewels 2004
Acrylic on canvas on wood mount
with glass beads fabricated
in collaboration with Maya Romanoff
101.6×101.6×5cm
Courtesy Shiraishi Contemporary Art Inc.